新田舎宣言・・・地域社会再生へのアプローチ

第１部

望郷の碑

☆大分合同新聞社（文：浅野 総一、写真：青木 茂之）

① わずか６世帯に
落人伝説の里／心のよりどころ／昔日のにぎわい

② 現金収入を求めて
平均年齢は 62 歳／ 50 年代から異変／焼き付く父の姿

③ 生まれ育った土地に愛着
老夫婦、二人で／街は落ち着かん／一人にはできぬ

④ 自らの暮らしは自ら守る
渋い歌声が響く／消えた伝統の灯／出番ない消防団

⑤ “未来への窓”学校も消える
名残とどめる／心の「真ん中」に／形だけの「休校」

⑥ 60 代夫婦「棚田守り通す」
険しい山腹刻む／体休める暇なし／悔しい台風襲来

⑦思いを残し、離れたムラ
山仕事を奪われ／病気きっかけに／自然生かせれば

《番外編》“集落崩壊”進む過疎大分県
集落の現状／消滅集落／行方／集落機能の状況／問題点

初版発行：2008 年 10 月 10 日

Next

はじめに

今、地方はひん死の状態にある。
過疎化と高齢化の波がムラを次々にのみ込んでいる。

高度経済成長の階段を駆け上り始めた 1960 年代以降、
日本社会は全国津々浦々から
数知れないムラ人たちを、
都会へ、都会へ、と駆り立てていった。
人がいなくなったムラには、荒れた田畑や山林が残され、
集落の崩壊、消滅がじわじわと進行している。

その一方では、
新天地を求めて都会からムラへ移り住む「新田舎人」たちの姿も目立つ。

過疎市町村の比率が全国一高い過疎大県・大分の
今と明日を見つめながら、地域社会再生への道を探る

1999 年 10 月 17 日

●デジタル版「新田舎宣言」について

「新田舎宣言―地域社会再生へのアプローチ」は、大分合同新聞が 1999 年 10 月 17 日から翌 2000 年 7 月 1 日にかけて掲載した全 9 部 56 篇の連載記事。今回、連載当時の記事と写真を原則そのままに、デジタルブックとして再構成しました。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、連載時点のものです。

2008 年 10 月 10 日　　NAN-NAN 事務局

Index
Back
Next

1 わずか 6 世帯に

1999 年 10 月 17 日

■落人伝説の山里

大分県南、豊後水道に面したセメントの街・津久見市。市街地から、さらに約 15 キロ。険しい谷沿いに、くねくねと曲がりくねった狭い林道を登っていく。

道の両側は、昼間でも薄暗い杉の植林地。車の行く手に突然、体にしま模様を残した「ウリ坊」と呼ばれるイノシシの子が現れた。怖がる様子もなく、車と追っかけっこを楽しむかのように、道路沿いを走り回って、山に姿を消した。

Index
Back
Next

車で 40 分ほど行くと、山の中腹に緑に囲まれた八戸（やと）地区がある。標高約 450 メートル。落人伝説が残る山里。

八戸への道を登り詰めたところ、大村集落にある「武速（たけはや）神社」。神社の境内に、高さ 2 メートルほどの石碑が建っている。

「望郷の碑」。その碑に刻まれた一文――。

■心のよりどころ

「大村に住む人たちは、豊かな自然の中に生活の糧を見出し、相互扶助の精神のもと助け合い、励まし合って生きてきた。確かに人は去った。しかし心のよりどころとしての想いは、この他を離れることはない。刻々として変わりゆく山容を見る時、その想いは一層強く胸に迫るものがある」

かつて 37 世帯あった大村集落も、今はわずか 6 世帯が残っているだけ。大村を離れた人たちと住民 35 人が、1996（平成 8）年に「八

故郷を離れた人、残った人、それぞれの思いが刻まれた「望郷の碑」（大村集落の武速神社）

Index
Back
Next

戸大村故郷を想（おも）う会」を結成。石碑の建立と、集落の歴史をまとめた「八戸小史」の編さんを計画した。

想う会の長老格である江藤宇吉さん（74）＝大分市梅ケ丘＝は「古い家の壁にカズラが巻き、やがて朽ちてムラは消えていく。ここにムラがあったことを形に残そうと、石碑を建てることにした」と話す。

石碑建立と小史出版の費用は、しめて 450 万円。地区の共有地だった山林と原野約 25 ヘクタールを、津久見市内の鉱山会社に売った代金の一部や寄付金を充てた。

■昔日のにぎわい

大村に残って、共有地を守ってきた黒田面一さん（64）。八戸の暮らしをこよなく愛しながらも、「子や孫の代になれば（共有地の地権者が）分散して、どこにいるか分からなくなってしまう。今が潮時だ」と踏ん切りをつけた。

99 年 4 月にあった石碑の除幕式には約 70 人が集い、大村は一時、昔日のにぎわいを取り戻した。

江藤さんは 30 人ほどの人を使い、材木を出荷する「素材屋」を八戸で営んでいた。しかし木材輸入の増加で価格が暴落、シイタケ栽培に転業した。八戸から大分市宮尾の山に通いながら、シイタケづくりをした。だが、それも 10 年ほどで限界に。結局、84 年に夫婦で八戸を離れた。

「今の家に移っても 4、5 年は自分の家ではないような気がして、たびたび八戸に帰った。故郷を出るということは、決断のいることです」。江藤さんは、八戸から持ってきた先祖代々の位はいを見つめながら、生まれ故郷を離れた苦い思いもまじる胸の内を語った。

ムラに住む人、離れた人。故郷に寄せるそれぞれの思いを刻んだ「望郷の碑」は、黄葉で秋の色に染まり始めた八戸の山懐に抱かれている。

Index
Back
Next

2 現金収入を求め都市へ

1999 年 10 月 18 日

■平均年齢は 62 歳

津久見市八戸（やと）地区の集落のひとつ大村。ひっそりとした神社の境内に、八戸にゆかりのある人たちの思いが刻まれた「望郷の碑」が立っている。

碑の裏側には、かつて大村にあった 37 戸の家の配置図が、往時をしのぶ人々の記憶に基づいて彫り込まれている。今も人が住んでいるのは、わずか 6 戸。屋根や壁に絡まるツタの葉の中に埋もれてしまいそうな廃屋が目立つ。既に朽ち果てて人々の記憶に残るだけの家も少なくない。

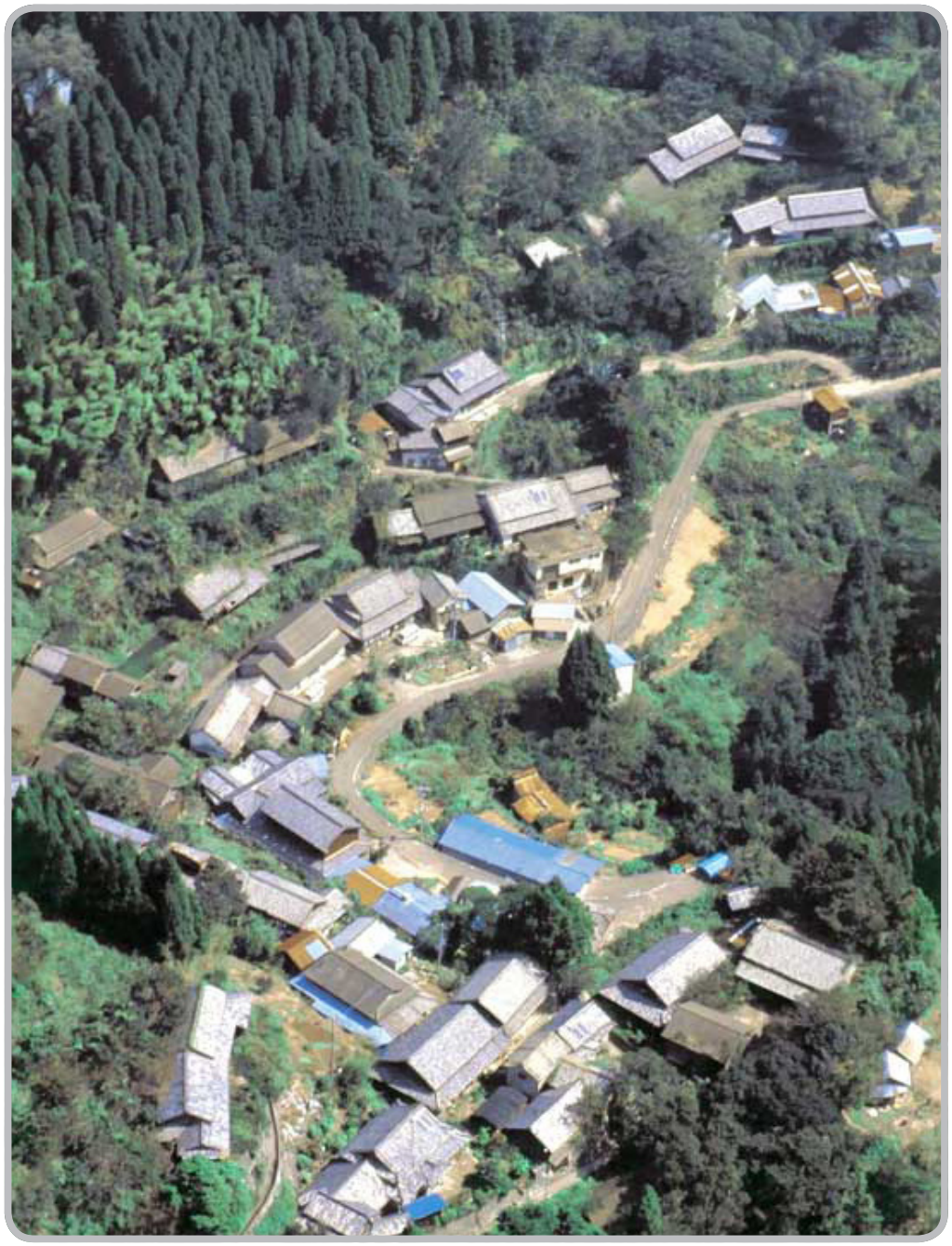
八戸地区には大村のほかに中村、与四郎という集落がある。居住者は三集落合わせても、11 戸・28 人（市調べ）。この中には、住民票は残していても既に津久見市中心部や市外に居を構えて、生活の場を移している人も含まれている。話によると、今も寝起きしているのは 9 戸・19 人だけ。平均年齢は 62 歳。20 歳未満の若者は一人もいない。

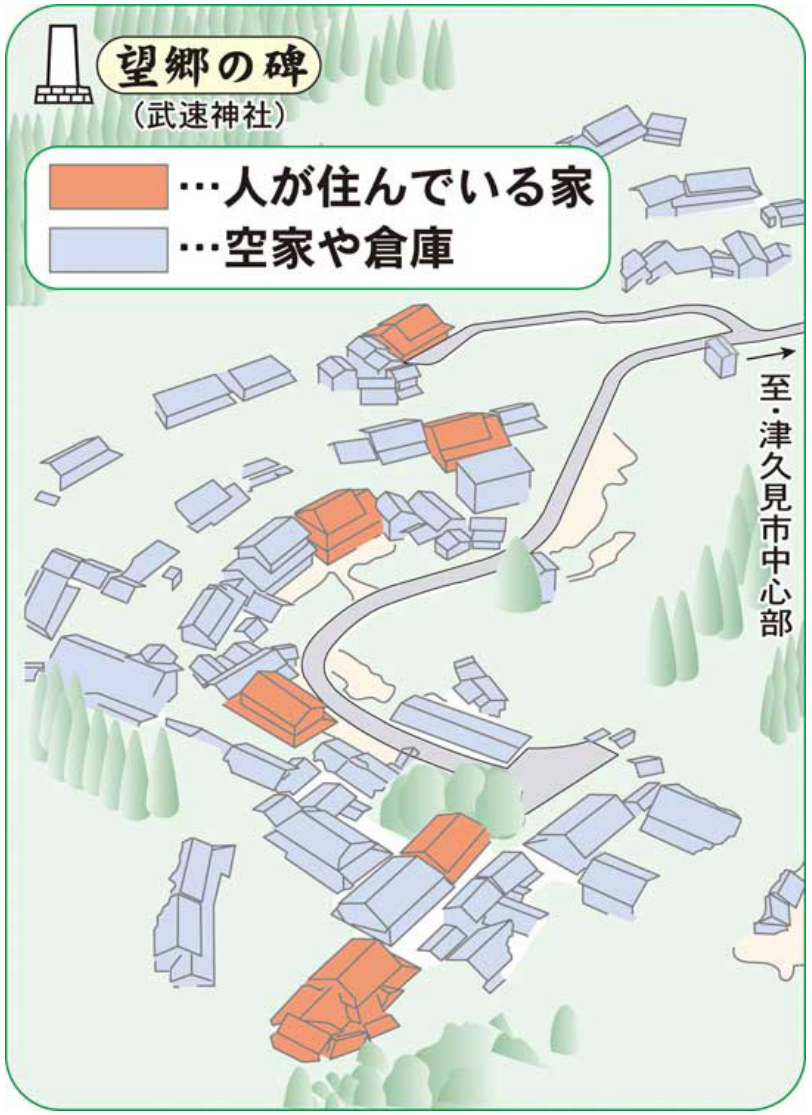
■ 50 年代から異変

「八戸大村故郷を想う会」が発刊した「八戸小史」によると、1907（明治 40）年には 457 人。54（昭和 29）年当時でも、まだ 426 人が住んでいた。炭焼きや畑作中心の農業、林業を生業（なりわい）として、隣近所が助け合い、肩を寄せ合って生きていく静かな暮らしがあったという。

静かなムラに異変が起こったのは、50 年代後半からだった。60 年代になると、くしの歯が抜け落ちるように、ムラを出ていく人が相次いだ。70（昭和 45）年には、50 戸・248 人に激減。わずか 16 年の間に 42％もの住民が、

Index
Back
Next





かつて 37 世帯が暮らしていた大村集落。今、人が住んでいるのは６世帯だけ…

住み慣れたムラの生活に別れを告げた。

この時期、大分県では 57 年に大分鶴崎臨海工業地帯の造成計画が決定。59 年には 1 号地（現・九州石油）の埋め立て工事に着手。64 年には新産業都市建設促進法に基づく新産業都市に「大分地区」が指定された。60 年 7 月に誕生した池田勇人内閣は「所得倍増」をキャッチフレーズに掲げ、日本は高度経済成長への道をひた走った。

都市への人口集中の裏側で、農山村の過疎化が同時進行した。

■焼き付く父の姿

八戸に生まれ、現在は津久見市内で塗装業を営む黒田雅一さん（56）は、70 年に八戸を離れた。

「子どものころの食事は、米と麦が半々の半麦（はんばく）なら良い方。イモを一緒に炊き込んで、満腹にさせるような時代だった」。雅一さんの脳裏には「夜が明けてから日が暮れるまで、炭焼きや田畑を耕す」、働く父親の姿が焼き付いている。

中学校卒業後は父親の仕事を手伝っていたが、木炭の需要が少なくなり、「現金収入を求めて」64 年から津久見市の製材所に運転手として勤めた。「八戸の人たちは林業が振るわなくなった 65 年ごろから、現金収入を得るために町に勤めに出始めた。そして、やがて八戸を出ていった」と雅一さん。

八戸から津久見市内へ、舗装していないデコボコ道を、雅一さんも毎日通っていたが、「長男の小学校入学が迫り、父親が亡くなったこともあって、一家で八戸を出ることにした」。

家族の生活と子どもの教育のために、八戸の生活に見切りをつけた。

段々畑に麦が黄金色に実る美しい八戸」。住み慣れた故郷を離れる雅一さんの胸中には、複雑な思いがあった。

Index
Back
Next

❸ 生まれ育った土地に愛着

1999 年 10 月 19 日

■老夫婦、二人で

標高約 450 メートルの津久見市八戸（やと）地区。ムラの朝は早い。数少ない働き手は早朝から間伐などの山仕事に出かける。通りで日中、人影を見ることは、ほとんどない。時の流れが止まっているような光景。数軒の家の軒先に干

４人の子どもはムラを出て結婚。二人暮らしの黒田さん夫婦

Index
Back
Next

された洗濯物だけが、生活の場としてのムラの存在を主張している。

バスも通らず、商店や病院もない。ムラの日常は静けさに包まれている。

黒田茂作さん(72)とツルさん(71)の夫婦は、大村地区に２人暮らし。４人の子どもは、八戸を出て結婚している。

「子どもたちからけがでもしたらどうすると止められた」。長年続けてきた山仕事を、今年やめた。テレビを見たり、自家用の野菜を作る毎日だ。

「働ける人は仕事に出るから、昼間ムラにいるのは私たちのような年寄りだけ。子どもの泣き声ひとつしない」。以前はムラに来ていた魚や衣料品の行商も、今はほとんど姿を見せない。

■街は落ち着かん

茂作さんもツルさんも、ともに八戸で生まれ、八戸で育った。不便さはあっても、住む人の気心が知れた八戸への愛着は強い。「孫の顔を見るのは楽しみだが、これだけ静かなところで暮らしていると、街は気が落ち着かん」と茂作さんは言う。

その一方で、茂作さんは過疎が進んだ八戸の消滅を予感している。茂作さんは「八戸の地盤は石灰岩だから、やがては採石場になるだろう」と考えている。

新納キミ子さん（77）は、一日のほとんどを自宅で過ごす。窓から見えるのは、知り尽くしたムラの風景。「あの家は、夫婦で午前６時ごろ山仕事に出て行った。昨日は午後７時ごろ、『帰ったかな』と見てみたが、まだ家の電気はついていなかった。あの〝ソラの家〟にも年寄りがいる」。

キミ子さんが何気なく口にした〝ソラの家〟。「限りなく空に近い、上の方にある家」を意味する。初秋の太陽が降り注ぐ八戸の上にあるのは、澄み切った青空だけだ。

Index
Back
Next

■ 一人にはできぬ

軽トラックのエンジン音を響かせて、息子の信幸さん（57）が山仕事から帰ってきた。シイタケ栽培が本業だが、夏場は地元の企業が所有する杉山の間伐作業に出るという。

「いつまでも元気ならいいが、老後のことを考えれば八戸を出ざるを得ないだろう。母は住み慣れた八戸を離れたくないだろうが、一人残すわけにはいかない」。信幸さんはキミ子さんを気遣う。

つるべ落としの秋の日が沈み、八戸が夕やみに覆われた。大村地区の三戸の家に明かりがともり、街灯がぼんやりと家の輪郭を浮かび上がらせる。

だんだんと青色の深みを増し、やがて漆黒に変わった夜空に一つまた一つと星の数が増えていった。平地では見られないほど多くの星が輝く八戸は、日中よりさらに〝ソラ〟に近づいていた。できた暮らしを楽しむ知恵と防災意識が根付いている。

Index
Back
Next

4 自らの暮らしは自ら守る

1999 年 10 月 20 日

二十数年間、一度も鳴ったことがない半鐘。八戸地区には暮らしを楽しむ知恵と自立の精神があった

Index
Back
Next

■渋い歌声が響く

「昔覚えた主水（もんど）が口説（くど）き。元を切り捨て、先（うら）はねまして、中の良いとこ一節なりと…」。

津久見市八戸（やと）地区。風の音と鳥の声だけが聞こえる静かなムラに、山に暮らす男の渋い歌声が響いた。盆踊りの音頭をとる口説きの一節。歌うのは、大村集落に住む黒田面一さん（64）。

名人の碑の前で盆踊りの口説きの一説を披露する黒田さん

八戸は炭焼きや畑作を中心とした農業、林業を生業にしていた。

1954（昭和 29）年当時は、426 人が暮らしていた。地元の人たちが「炭や薪を背負う『せいた』が、背中から離れることはなかった」と言う厳しい労働の日々。年に一度の盆踊りは、ムラの人たちが最も楽しみにしている一大イベント。八戸の人たちがお互いのきずなを、あらためて確かめ合う場でもあった。

■消えた伝統の灯

「盆踊りの夜は午後 8 時ごろから、音頭や太鼓の音が聞こえ始める。ムラの人と八戸に里帰りした人が一緒になって、午前 2 時ごろまで踊り続けた。午後 11 時ごろの中入れ（中休み）には、キュウリの塩もみを肴（さかな）に酒を飲み、子どもには菓子を配る。酔いが回ったこ

Index
Back
Next

ろ、男が女に化けたり、女が背広姿に仮装して、また踊る。大人も、子どもも、年寄りも総出で、家に残っている人はほとんどいなかった」

しかし、過疎の進行で年々参加者は減る一方。盆踊りは十数年前についに途絶えた。ムラの伝統の灯が一つ消えた。

盆踊りの会場だった八戸公民館前の広場には、音頭師・戸沢勇吉さん（故人）をたたえる碑が建っている。美声で知られた口説きの名人だった。碑の前で、久しぶりに口説きを披露した黒田さんの表情は、昔を思い出したのか生き生きしていた。

■出番ない消防団

八戸公民館から見えるムラの火の見やぐら。「ここ二十数年間、一度も鳴ったことがない」という半鐘が下がっている。八戸では 76 年に山林火災があって以降、23 年間も火災が起きていない（市消防本部）。

八戸にも消防団（八戸部）はある。団員は八戸に事業所がある企業の従業員などを含めて 8 人。幸いにして最近は出番がない。「それだけムラの人が火事に気を付けているということだ」と黒田さん。

津久見市の中心部から八戸までは車で約 40 分かかる。火災が起きたり、けが人や病人が出ても、おいそれとは救援が間に合わない。

「救急車の出動も年に一度あるか、ないか」（市消防本部）。「八戸には寝たきりの人はおらず、ホームヘルプサービスなど市の在宅福祉サービスを受けている在宅高齢者もいない。いよいよ体の具合が悪くなったら、市中心部の病院や施設に入ったり、親族の家に移ることになるのだろう」（市）。

八戸の人たちは防火や健康管理に最大の注意を払う。自らの生活や暮らしは自ら守る。代々、受け継いできた暮らしを楽しむ知恵と防災意識が根付いている。

Index
Back
Next

5 “未来への窓”学校も消える

1999 年 10 月 21 日

100 年の歴史があった津久見小学校八戸分校。旧校舎も 10 月に取り壊された

Index
Back
Next

■名残とどめる

津久見市八戸（やと）地区。中村集落の林の中に、小さな木造家屋がひっそりと建っている。明治時代から約 100 年間、八戸の子どもたちをはぐくんできた津久見小学校八戸分校。

児童数の減少で、1983（昭和 58）年に休校となり、再開されることなく 97 年 3 月、廃校になった。分校から子どもの姿が消えて 16 年余り。風雨で傷んだ旧校舎は、倒壊寸前の無残な姿をさらしていた。

子どもたちがかいた壁画のある教室、人をかたどった石こう像が残る校庭が、どうにか学校の名残をとどめていた。

渡辺タツ子さん（82）＝大分市にじが丘＝は、終戦後の 51 年、夫の輝さん（故人）と 2 人、ともに教師として八戸分校に赴任した。妊娠 9 カ月の大きなおなかを抱え、山道を歩いて登ること 2 時間余り。「分校に着いた時は『ここで暮らすのか』とため息が出た」。

分校には大村、中村、与四郎の三集落から児童が通っていた。

児童数は渡辺さんがいた 58 年がピーク。89 人いた。「複々式や複式授業で、毎日が戦争のような忙しさだった」という。

教室の壁には子どもたちがかいた絵が残されていた

■心の「真ん中」に

「本校と比べて何となく委縮した分校の子どもたちに自信をつけさせたかった」。子どもたちと山で採ったカジ皮（コウゾ）を売り、自転車や野球道具を買って猛練習をした。ソフトボールの試合では津久見市内の小学校に勝ったことも。分校の子どもたちの意気は上がった。

教室と廊下でつながった宿直室が、渡辺さん

Index
Back
Next

夫婦の住まい。「ムラの人は当番を決めて、学校の教材や図書、食料品や日用品を津久見の町から運んでくれた。野菜や漬物もよくもらった」。分校の存在は、地域で暮らす人たちすべての心の真ん中にあった。素朴で親切な八戸の人たちに囲まれ、渡辺さん夫婦の分校暮らしは 10 年を数えた。

竹内義昭さん（49）＝臼杵市下南小学校教諭＝は教師 2 年目の 73 年に八戸分校に赴任した。学生時代に山岳部員だった竹内さんの愛称は「山ゴリさん」。子どもたちと一緒に、八戸の山を跳ね、かっ歩した。当時の児童数はわずか 25 人。より多くの児童と交流させようと、本校への臨時入学が始まった。「あれが分校統合の引き金になったのかもしれない」と振り返る。

■形だけの「休校」

佃日出雄さん（45）＝中津市小楠小学校教諭＝は 79 年から休校までの 4 年間、八戸分校で過ごした。80 年には分校の「百年祭」があり、地区を挙げて祝った。「分校の新入生は 79 年に入学した一人が最後。学校に上る前の子どもは、ムラから一人もいなくなっていた」。休校になった年、全校児童はわずか 5 人。「休校」といっても形だけ、やがて廃校になるだろう。口には出さなくても、ムラのだれもが“運命”を感じていた。

竹内さんは「学校は『地域の未来への窓』。分校が休校になった時、八戸もいつかなくなるのではないかと思った」と話す。

渡辺さんは 2 年前、傘寿（80 歳）を祝ってくれた八戸分校の教え子と分校を訪ねた。「校舎が荒れていたのは悲しかったが、時の流れだから…。八戸を離れた人たちは立派にそれぞれの生活を築いている。それはそれで良かったんじゃないでしょうか。」

八戸分校の旧校舎は、今年 10 月 5 日に解体された。跡地は林道工事の残土捨て場になる。

Index
Back
Next

6 60 台夫婦「棚田守り通す」

1999 年 10 月 22 日

■険しい山腹刻む

市街地の背後に石灰岩の山が迫り、平地が少ない津久見市。市内で唯一の水田が、八戸（やと）地区にある。番匠川の支流・井崎川沿いの険しい山腹を刻んだ約 30 アールの棚田。

山からのわき水が田んぼを潤す。周囲には、電流が流れる電気さくが張ってある。イノシシよけだ。谷を隔てた棚田には、竹の樋（とい）を渡して、わき水を導く。どの水田にも水が均等に行き渡り稲が均一に成長するよう、知恵と工夫がある。

木村集落から 6 キロの道を通いながら、黒田面一さん（64）と妻の礼子さん（61）が守り続けている。田んぼの傍らに、江戸末期から明治初期にかけてこの水田を開墾した先祖の墓がある。

「昔は八戸地区のほとんどの家が、狭い棚田でモチ米を作っていた。正月に食べるモチをつくためだった。今みたいに毎日、米を食べられる時代ではなく、家族の多い家では麦やイモを一緒に炊き込んで食べていた。厳しい暮らし。八戸の人たちにとって、米の飯は豊かさの象徴でもあった。

「今、米は買った方が安いが、作物を育てて収穫する喜びは何ものにも替え難い。先祖が苦労して開墾した水田だから何とかして守り続けたい」。採算は抜きにして、黒田さんには米作りへの執着がある。

■体休める暇なし

黒田さんの一年は、春から秋までの米作りと、秋から春にかけてのシイタケ栽培が中心。

6 月初めの田植えに向けて苗づくりと代かき、田植えは市内に住む親類との共同作業。米

Index
Back
Next

津久見市で唯一の水田、急傾斜地の狭い棚田で稲の実り具合を見る黒田さん夫婦

Index
Back
Next

作りの合間を見て、夏場は山の下刈りを請け負う。10月半ばごろに稲刈り。稲刈りと前後して、シイタケ栽培にかかる。ほだ場の草切りをして収穫、乾燥と続く。体を休める暇はない。

八戸の人は、とにかくよく働く。黒田さんはこの夏、ヒノキ林の下刈り作業を請け負った。現場は佐賀関町。車で約１時間半かかる。午前六時ごろ家を出て、午後７時ごろ帰宅する毎日だった。

そんな八戸の暮らしの中で、黒田さんが「最高のレジャー」と楽しみにしているのが狩猟。「猟をやっていると何もかも忘れる。仕留めたイノシシの肉は猟に行った仲間で均等に分ける。寒い時期のイノシシの肉は脂が乗って最高にうまい」。

■悔しい台風襲来

米の収穫期を前にした９月、台風18号が大分県を襲った。強風で稲がなぎ倒された。

黒田さん夫婦は９月下旬、倒伏した稲の穂が水につかって発芽しないよう、水田の水切りをした。

「稲穂に実は入っているが、収量は落ちる。刈り入れの手間もかかる」。

倒れた稲穂をいたわるように手に取って、実の入り具合を確かめる黒田さん夫婦。悔しそうに顔を見合わせた。

収穫した米は２人の息子にも分ける。「できた米を子どもたちに食べさせるのが楽しみ。今年は台風にやられたが、もちろん来年も作る」。黒田さん夫婦は19日から稲刈りを始めた。

黒田さんは八戸生まれの八戸育ち。「子どもたちは八戸を出たが、私は動けるうちはここを離れたくない。できる限り、故郷を守っていきたい」。

自然と向き合い、自然と共生する日々の暮らし。八戸への愛着は限りない。

Index
Back
Next

7 思いを残し、離れたムラ

1999 年 10 月 23 日

■山仕事を奪われ

津久見市内の採石場で働いている新納正幸さん（65）は、八戸（やと）地区出身だ。1978（昭和 53）年に八戸を離れ、市内中心部に住居を移した。

八戸にいた若いころは、山仕事と段々畑で麦やイモを作っていた。「丸太を製材して運び出すために、100 キロ以上もある移動製材機を肩に担いで山に入った。農作物や炭も『せいた』で担いで運んだ。随分無理をした。それでも現金収入は少なかった」。

林業の衰退が新納さんから山仕事を奪った。現金収入を得るために 71 年から市内の鉱山会社に勤め始めた。

八戸では地区の共同作業を「立ち会い」と呼ぶ。道路沿いの草刈りや清掃など。「会社に勤めていると、立ち会いに出られない。集落の務めと会社勤めの両立は難しい」。正幸さんは八戸を出る決心をした。「先祖が残した段々畑をこのままにして、街に出ていいものだろうか」。思い悩んだ末の決断だった。

■病気きっかけに

新納タツヱさん（65）もムラを後にした一人。大分市葛木に家を新築した長男の徳光さん（39）一家と暮らし始めたのは 93 年。夫義雪さん（故人）の病気が、直接のきっかけだった。

「このまま八戸で暮らしたい」と渋る両親。徳光さんは説得し続けた。「父が心臓病で倒れた。母は車の運転ができない。八戸の交通の不便さを考えたら、二人きりで置いとけなかった。父はなかなか『ウン』と言わなかったが、最後は折れた」。

タツヱさんは 24 歳で野津町から嫁いだ。義

Index
Back
Next

雪さんが馬で木材を運搬、タツヱさんが段々畑を耕す八戸の暮らし。長男の徳光さんは小さいころから大学進学を希望していた。「進学させるにはお金が必要だが、農業や林業ではお金にならん」。夫婦は市内の鉱山会社で働き始めた。

八戸地区は「病人を戸板に寝かせて運んだ」(八戸小史）という“陸の孤島”だった。59 年に大村集落まで林道が完成。このころムラに初めてトラックが入った。しかし「町から遠く、医師は往診をしてくれなかった。けがをすればムラの人に迷惑をかける、と気を使って働いた」とタツヱさん。、

「今は何かあってもタクシーを呼べば、すぐ来るから安心。それに孫はやっぱりかわいいわ」

八戸を離れた大分市で子供と孫に囲まれて暮らす新納タツヱさん（右）

Index
Back
Next

と笑う。だが 30 年以上も暮らしたムラへの思いは、断ち切ろうにも断ち切れない。「望郷の碑を見に、八戸に行ってみたい」。

住民の平均年齢は 62 歳、集落崩壊が現実になりつつある

■自然生かせれば

徳光さんは大分市鶴崎中学校の教諭。街に下宿して津久見高校を卒業後、希望通り大学に進んだ。

「八戸は林業が中心。山仕事がなくなり、次々にムラを出ていった」。“生活のため”と理解しながらも、徳光さんにはどうしても割り切れない思いが残っている。「集落が消えるのは時代の流れだが、こうなってしまったのはなぜなんだろうか、と考える」。

八戸地区の碁盤ケ岳（716 メートル）西側一帯に広がる「八戸高原」。山口県の秋吉台と並ぶ全国有数のカルスト台地。51 年に県立豊後水道自然公園に指定された（現在は指定解除・立ち入り禁止）。「四季折々の美しい自然を楽しむハイキング客などでにぎわった」と「八戸小史」に記されている。

集落崩壊が、現実のものになりつつある八戸。徳光さんは「八戸高原の自然を生かすような、活用の仕方があったのではないかと、今も考え続けている。

Index
Back
Next

《番外編》“集落崩壊”進む過疎大分県

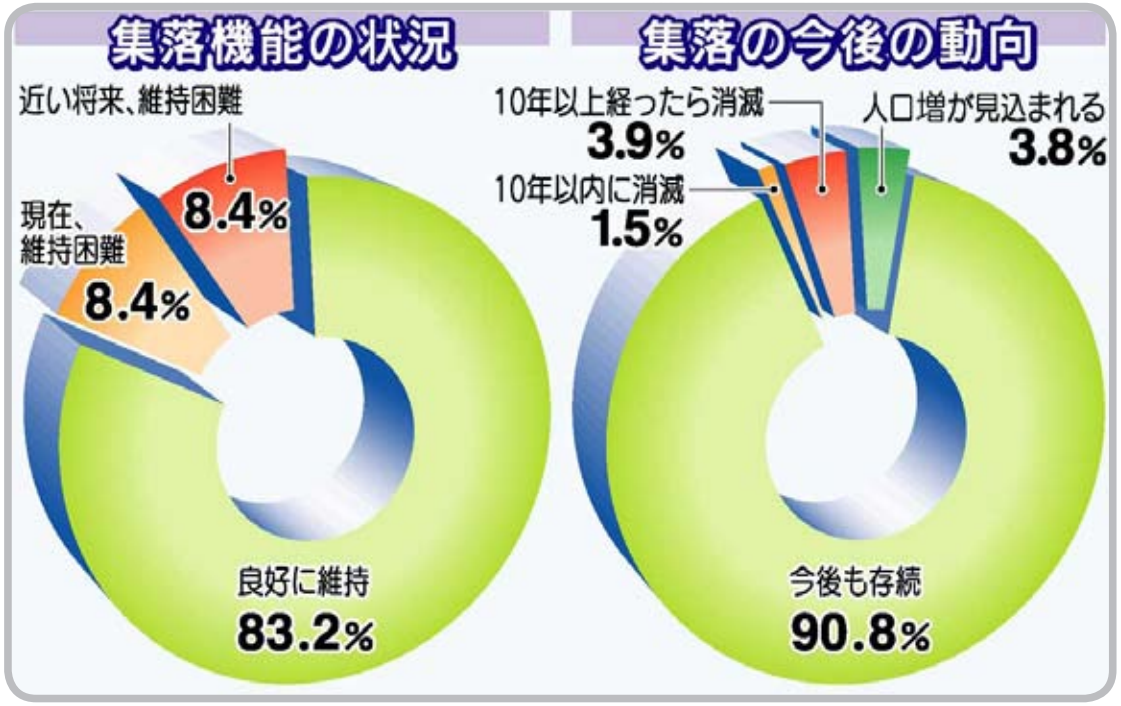
1999 年 10 月 24 日

今後 130 余が消滅の危機、残っても機能維持に不安

Index
Back
Next

過疎市町村率 77.6％、全国トップの過疎大県・大分。県内 45 の過疎市町村では 1960（昭和 35）年以降、人口流出と高齢化によって 36 の集落が消滅。今後も 130 を超える集落が消滅の危機に直面するなど、進行する集落崩壊の実態が大分合同新聞社の調査で明らかになった。

中山間部の過疎地域では、農林業従事者の減少による地域産業の衰退や農地・山林の荒廃が進行。人口減少は集落内の共同作業や祭り、消防団活動などにも支障をきたしており、集落機能の維持さえおぼつかなくなっている。



【集落の現状】一定の土地に数戸以上のまとまりがある「集落」（自治区単位も含む）は、45 市町村で計 2446。このうち 65 歳以上の高齢者の割合が 50％を超える「超高齢化集落」は 246 で、全体の 10.1％を占めている。

【消滅集落】60 年から 98（平成 10）年までの 38 年間に消滅した 36 集落のうち、6 集落はダム建設などによる集団移転。住民が分散して転居した集落は 21、徐々に衰退した自然消滅が 6 集落あった。県が独自に指定している「準過疎」の 5 市町村も加えると、消滅集落は 41 にのぼる。

【集落の行方】市町村の過疎対策担当者の分析では、今後 10 年以内に消滅する可能性がある集落が 38（1.5％）、将来消滅する可能性があ

Index
Back
Next

る集落が 95（3.9％）。両方合わせると、全集落の 5.4％に当たる 133 集落が消滅すると予測している。存続すると見られる集落は 2228（90.8％）だが、人口増が予想される集落はわずか 92（3.8％）しかない。

【集落機能の状況】道路の補修・清掃、祭りや行事など、集落ぐるみの共同作業は地域社会を維持していく上では欠かせないもの。こうした集落としての機能を支えてきたのが自治会や隣保班であり、消防団、婦人会、子供会といった集団だった。過疎化・高齢化は集落機能の維持を危うくし、地域社会崩壊の恐れさえ指摘されている。

集落機能に関しては「維持が困難になっている」集落が 197（8,4％）。「近い将来困難になりそう」も合わせると、395 集落（16.8％）にもなる。「良好に維持されている」ところは 1952（83.2％）。「超高齢化集落」に限って見ると「良好に維持」は 46.6％に過ぎない。53.4％は「困難」か「近い将来困難」― と見ている。「集落は残っても、今後も人口減少は止まらない」と、大半の市町村が悲観的見方。集落機能をどう維持していくか、行政にとっても大きな課題になりそう。

【抱える問題点】「農林水産業の従事者の減少などによる経営困難」と回答したのが 33 市町村（73.3％）で最も多かった。次いで「耕作放棄地、管理放棄林の増大」が 32 市町村（71.1％）あり、地域産業への影響が大きな問題となっている。

また「道普請（みちぶしん）や清掃など共同作業に支障」と答えた市町村が 26（57.8％）、「祭りなど伝統文化活動の衰退、消滅」が 23（51.1％）、「公共交通機関の廃止や縮小」が 19（42.2％）あった。

◇

実態調査は、過疎地域活性化特別措置法によって過疎地域に指定されている 45 市町村を対象に実施。すべての市町村から回答を得た。

Index
Back
Next

■オオイタデジタルブックとは

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「新田舎宣言」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

「新田舎宣言 ― 地域社会再生のアプローチ」　第 1 部●望郷の碑

文：浅野 総一、写真：青木 茂之

初出掲載媒体　大分合同新聞（1999 年 10 月 17 日～ 10 月 24 日）

《デジタル版》

2008 年 10 月 10 日初版発行

編集　大分合同新聞社

制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社総合企画部内）

ⓒ 大分合同新聞社

Back
Index